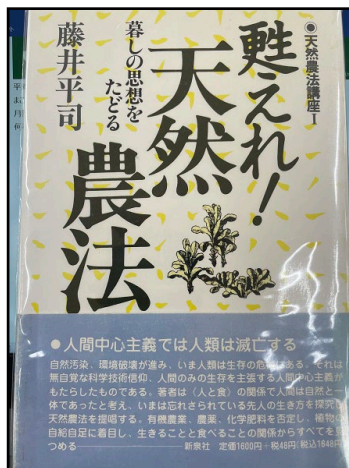


謹賀新年

昨年中は、弊社事業に御尽力いただき、
まことに、ありがとうございました。
本年も、何卒よろしくお願い申し上げます。



前月号で少しふれた本。1983年初版刊行されていた。多分無農薬野菜と自然食品の行商を滋賀県でしていた時期だが、自分は人生を間違えていると思い、転換を始めた頃と思う。

『菌に衣着せぬ』文体

で、鋭く切り込んでくる結論で楽しませてくれる。

『もともと<農-食>の関係には、当然、お金の勘定はありませんが、一生懸命つくれば、自分で食べきれないほどできます。だから、食べきれない分は、生産していない人にタダであげなさい。消費者は生産者に頼んで、タダでもらいなさい、と私は言うのです』と、のっけからかなり根源的な事を宣(のたま)う。『ところが、支配の構造は、消費者が「買ってやるから」と恩着せがましいことを言うので、生産者はバカらしくなって、働き方をお金に応じて加減するのです。』『昔からずっと、農産物に値段をつけて来たのは、農家でなくて消費者ですよ』『本質的には「余ったものは、どうぞタダでいいですから食べてください」という気持ちを「ありがとうございます」と言って受け取れる。』『その関係に「食」の哲学があるのです』。断っておきますが、これは先に書いたように今から 40 年も前の話しとしての記録です。この頃は特に深く切り込んで考える人が多かった。あらゆる本質を根源的に考える習慣があったように思う。

だから読んでいて疲れるのだが、根源的という事は過激な事だから面白い。動物と植物の違いは消化器官を身体の中に持っているか、外に依存しているかだと以前米国の彼女に書いた。共通する事は、ともに生き物で命はひとつだという事。この命があっち行ったりこっち行ったりしているだけ。では、人間は動物と同じかという議論も著者はぶった切っていて、『そう言っているのは支配者で、支配者は自分だけが動物と違い君たちは命を他者の為に盗られる動物と同じだと言っている』と、読んでいて気持ちがいい。この彼は、人間と他の動物との違いは『作って食べているかどうかだ』と言う。実に明快だ。『だいたい農家というのは自然の中でしぜんに生きている。補助金によって生かされているんじゃない、みな自分らの主体性で生きている。そうじゃなければ、作物という生き物を相手にできないのです』『お互いに生かされているというようなことであれば、他者に迷惑をかけすぎます。他者に迷惑をかけるという生きものの生存条件というのは、地球上に生物が登場して以来ないんです。みんなそれぞれ、自立の精神、自立の気持ちがあつてこそ生きてきたのです』。

深く突き詰めて考えていくと、本質的な素朴さに行き着く。だからこそ言い切れる。多様性・多角的などと曖昧なところで立ち止まっていないからで、哲学とはそういう次元。『<人と食>の関係とは、人間の生きざまと作物の生育との関係であって、それが生死にかかわる大変なことなのです。そのただならぬ関係において<食べ物>とは何か。また<生きもの>とは何か、を考えることです。そのうえで、人間とは、どんな生きものなのか、その存在を知ることでしょう。なぜならば、人間が生きていくための<食べものは生きもの>だからです』『食べものも生きものだから、その生きものも育てなければいけない。自分の命も守らなければならない』。ふ〜む、何故今頃こんな過激な本を、また読もうと思ったのか。

2026 年、2026 年だ。あれほど言ってきた年だ。2025 年が始まる年だと思っていたが終わる年だったという 2026 年だ。つまり新しい枠組みが始まる年だ。20 年ほど前に中国の人間が『日本なんて国は、20 年後にはキルギス共和国と同じ位置に後退する』と自慢げに漏らしたが、其の通り海外で感じる日本の所得の低さに届かず、国内の高級レストランは日本人の手の届かない価格になる。だけどそのレストランに入ってみるとその質は、明らかに低下していて上っ面の人間の、更に上っ面を満足させて高額を得るような質の低さという皮肉な世界となっている。この転換点に原点に立ち返るのは、なるほど意味深い事になる。

みんなが Money に憑依されて本質を見失っていく。今から 40 余年前の 1983 年にこんな本が刊行されていたのは興味深い。そういえば出版社の『新泉社』、こんな本ばかりを出版していたような記憶が存在する。<https://www.shinsensha.com/company/> 興味が湧いた人は、是非この URL をクリックしてみてほしい。自分は八百屋を遣っているけれど、本屋の息子だという事を思い出させてくれる。

では、何が目に見えて変わって来たか。株価は上がりっ放しで円は下がりっ放し、金利は上がって来た。でもそんな事はどうでもいい。一番の変化は政治レベル。オジサンはクビになりオバサンたちが登場した。しかもなかなかの役者に見える。日本は一応親米国家である。親中でもあった。今もそうなのかも知れない。でも忘れていないか、支配者は国家ではないという事実。という事は目に見えている劇はすべて眼くらませで、互いに役を演じている事になる。どう見てもそのシナリオの鍵は、『三文書改訂』にある。『100 年我慢しろ』これは東京青果内の仲卸社長。2037 年最後に残った普天間基地が米国に返ららしい。東亜敗戦以降進駐軍、駐留軍と他国の軍事基地が国内にあり、その行動の自由を保障するという条約下にいる。その後は名実ともに軍事パートナーとなる。だけど考えてみれば直ぐ分かる。軍事力に圧倒的な差がある。そして、互いの仮想敵国もまた我が国とは戦いにすらならない軍事力。つまり、核を保有しているかいけないかだ。

抑止力という言葉。盛んに“三原則”の解釈が議論に登場している。やられてもやり返してはいけないのか、そうだとするとまたやられるという風には考えないのか。ただこんな議論をしていると、焦れた支配者は本当にミサイルのひとつも西の国からとばして来て、議論そのものも吹っ飛ばす。事実、岸田内閣が『三文書改訂』を可決しようとしても親中の連立党が異を唱えた。すると何発も上空を飛んできた。

Youtube というのはまこと面白い。手をボックに突っ込み対応した人物は、散々ネタにされ、おまけに『〇〇〇国』と投稿され終わった。その通り、『中国はひとつ』と認めているが、どの国も台湾は独立国だとして、台湾も中国だとの主張には、『意見として尊重します』とだけ言っていて、曖昧なまま放置している。確かに台湾は清国滅亡後のどさくさに北京を亡命した蒋介石が作った亡命政権と言える。北京の紫禁城より台北の国立故宮博物院の方が、亡命しなに沢山持ちだしたから、実は多く宝物があるという噂もあったりして、だから中華人民共和国が今になって言う気持ちは理解するし、「尊重します」となるのは理解しやすい。でも革命政権樹立の時は、手いっぱいでもそこまで手が回らなかったのだろう。先月も書いたように roots が同じなら時間が掛かっても平和裏に実質ひとつの国家になれる日が来るように思うし、目標とするタイミングもあろうかと思うので、当事者同士、利害相からむ周辺も含めて納得させることが必要と思い、それを政争に使うべきネタではないと思う。

『生活と言うんじゃなしに、暮らしと言っていたと思う』『人間あかりのない時の生活状態を考えてみると、お日さんが上がってきて明るくなる時期を、朝＝旦という。』『お日さんが沈んで暗くなる、これは暮れです』『人間というのは明るい時には仕事をしなければ、作って食べられない。だから、旦から暮れまで、今の言葉でいえば昼です。これを<旦暮>と言っていたに違いない』。つまり『田んぼ』というのは、これが語源だろうと言っている訳。天然農法というのは、農業資材・技術の話ではなく、生きて、暮らす事を言っている。

有限会社アルファー 吉田清一郎